

# 子どもたちの「遊び」に思う

大 滝 靖 子



はじめに

四月に新しい入園児（四歳児）を迎えてから、早くも一か月余りが過ぎました。今日、この頃の園児たちの表情や行動からは、入園当初の不安や緊張の色は消えて、子どもたちには、幼稚園が自分たちのものとなり、自分たちが思い切り遊べるところという自信さえ持って、毎日、元気に、明るく登園してきます。そして、早々に自分の「遊び」へと入ってゆきます。また、遊びかたも、日、一日と遊びの体験を積み重ねながら、工夫し、変化させて、新しく「遊び」を作っている様子には、驚くと共に、子どもたちの叡智とたくましさ、本当に感動させられます。

## 一 現代の子どもの「遊び」の傾向

東京で生まれ、東京で育った私の子ども時代には、交通戦争

という言葉はまだありませんでした。スモッグ警報が出て、戸外での遊びを手控えなければならぬようなこともありませんでした。また、遊び道具も、今日のように豊かではありませんでしたが、それでも十分に遊びました。遊びは自然が相手でした。四季折々の草木の中で、年齢、性別が異なる子どもたちが、いっぱい集まって、夕方暗くなるまで、真黒に泥まみれになって遊びました。遊び道具は、自然物をうまく活用し、工夫して作ったり、あるいは、父や母の手づくりが主なものでした。このようにして十分に遊んだという満足感は、私の身体や心の隅々にしみこんでいて、折にふれ、とてもそれらが懐かしく思い出されてくることがあります。

さて、現代の子どもたちは、どんな場所でどんな遊びをしているのでしょうか。さき頃都内にありますA園、B園の二つの幼稚園を対象に、子どもたちの家庭での遊びについて調査してみました。

表(六十一頁参照)の結果から、都会の子どもたちの「遊び」の傾向を左のようにまとめました。

①遊び場が、大変限られている。

(団地住まいが多い。交通戦争からくる心配)

②好んで行なう遊びの道具のほとんどが、既製遊具である。

しかも、遊具の種類、数は豊富に持っている。

③テレビっ子である。

④運動量が甚だしく少ない。

⑤ピアノ、英語、進学塾、体育教室などのおけいこ事のた

め、遊ぶ時間が足りない。

以上、数少ない資料からですが、都会の子どもたちの遊びの傾向が、大変よくあらわれていると思われました。そこには、子どもたちの「遊び」に不可欠な、遊ぶ場所、遊び道具、遊びの時間などにおいて、今後、十分考慮してゆかねばならない問題が含まれていると考えるのです。

## 二 「遊び」の必要性

幼児の生活のほとんどが「遊び」であるということは、幼稚園の教師でなくとも誰でもがよく知っていることです。おとなたちが「遊び」を始めようとする動機には、「遊び」によって

運動不足を補いたいとか、あるいはストレスを解消しようとか、あの「遊び」をすることによって、きっとよいことがあるでしょう……などと、「遊び」に、自分にとって都合のよい、大きな意味を持たせたり、ある者には、損得を始めから予測したり、計算したりすることもあるかと思われれます。しかし、幼児たちには、このようなことはほとんど認められません。それは「遊び」そのものが、子どもたちの生活の全てで、夢中になつて、一生懸命に遊んでいる子どもたちの表情には、実に真剣さそのものがあらわれています。

先日、ある人が私に言いました。「幼稚園の先生はらくでいいですね。子どもは放っておいたって好きなように遊ぶし、子どもたちと一日いっぱい遊んでいて、それで月給がもらえるのですから」などと……。何という幼稚園に対する無理解な言葉でしょうか。私たちには、この上もない暴言と聞こえます。こんな時には、私は、肩に力を入れて、反論せずにはいられません。しかし実際に子どもたちは、たとえ野放しにしても、元気に遊びますし、周囲にある物を何でも遊びの道具として、思い思いの遊びを始めます。ですから、幼稚園で子どもたちの相手をしたことのない人の目には、右のような感想も出るかも知れません。しかし、これは目先に映った、表面的な

感想と申さなければなりません。幼稚園の教師たちは、毎日毎日、本気になって園児たちの「遊び」に注目しながら、一人一人の子どもたちが元気を出して、大いに遊んでくれることを願ひ、そして、「遊び」がより発展してくれることを心から願っているのです。ですから、教師たちは、人的にも、物的にも、「遊び」の環境を準備したり配慮したりすることで明け暮れているのです。

それでは、なぜこれほどに幼児たちには、「遊び」が必要なのでしょうか。私は、今日までに、少しずつ分りかけてきた考えを、未熟でお恥ずかしいのですが、少し、次に述べてみたいと思います。

「百聞は一見にしかず」という諺があります。幼児はどんなにすばらしいお話を聞いても、すぐに理解することは困難なようです。なぜなら、幼児たちは、自分で体験して初めて、その話が、その問題が、自分のこととして理解することができる、納得することができるからです。幼児にとっては、自分の手で、自分の皮膚で、自分の頭で、自分の心で、実際に「体験」することが、本当に重要な意味を持っているのです。幼児は、くり返し、くり返し、様々の体験を通して、多くのことを学んでゆくのです。この遊ぶ「場」、体験する「場」、それが幼

稚園児の「学び」であると考えられます。前にも述べましたが、子どもの生活は「遊び」ですから、「遊び」の経験が豊富な子どもほど、生きる力が強いと申しても、過言ではないでしょう。幼児期の「遊び」は、心身共に豊かな人間になるための土台となっていると共に、明日へ生き続ける土台を養っているのだと思います。感動する心、変化に気づく心、探究心、創造する心、失敗から立ち上る強い心、そして、友だちと共に、喜びも、悲しみも分かちあえる心……すべて、「遊び」を通して、自分のものとして、体得できるのです。人間を木に例えるならば、子どもは、小さいながらも一本の木です。根あり、幹あり、枝あり、葉もある一本の若い木なのです。どの子どもも、大木になり得る可能性をいっぱい持っているのです。

そこで、教師は前に述べたような、人間形成の土台となる芽を幼児からひき出すことを務めなければならぬと思います。そしてこの後、幼児たちが大きくなって学齢期に達し、知的な面、体育面、社会的な面などの多くの課題を学んでゆくために、柔らかく、しかも強い、受け入れの態勢をしっかりと身につけさせるように手助けすることが、私たち教師に課せられた大きな仕事だと思えます。すなわち、これが幼稚園の教育であると考えるのです。

### 三 園児に学ぶ

入園直後、二人の四歳男児が、砂場で黙々と遊んでいた。時々、水をエッサエッサと運んでは流している。海でも作っているのかしらと、子どもの答に期待を持って、「何を作っているの」と聞いたたら、「おだんご作ってるの」という返事であった。そしてほぼ一か月後、同じ二人がまた砂場で遊んでいた。「何作っているの」と質問したところ、「あのね、ここが山でね、ここトンネルだよ、この下を川が流れているんだよ」と説明してくれた。

○  
入園後一か月過ぎた四歳女児。ある日のこと、「おへやにあつまりましょう」という皆の呼び声で、ほとんどの園児が集まってきた。しかし、一人の女児がなかなか戻ってこない。さがしながら迎えに行ってみた。その女児は、水がいっぱい入ったバケツを持ち、無心にシャベルで水をすくいながら、木々に水をやっていた。

○  
五歳男児。クラス全員で、赤かぶの成長を期待しながら世話を続けてきた。しかし、長雨続きと害虫のため、赤かぶは思

うほど大きく成長しなかった。それでも、皆で収穫を喜びあった。園児たちが帰ってから、プランターを見ると、二本の赤かぶが植えてあった。取り残したのかと、翌日、そのグループに聞いてみると、ある男児が、「あまり小さくてかわいそうだから、栄養の土の中にうめておいたの」

○  
五歳児の女児。三月のある日のこと、女児が、顔をかがやかせて、息せききって私に知らせにきた。「私がね、プランコに乗っていたらね、なんだか、春のような風が、ここ（ほほをさして）をなでたよ」

#### あとがき

以上、「遊び」の重要性について述べてきました。前述の現代の園児たちの「遊び」の諸問題を解決してゆくためには、子どもの身体発達の立場からの「遊び」の意義、子どもの心の充実に於ける「遊び」の指導など、体育的にも、心理的立場からも、今後、さらに一段の吟味、考究が必要ではないでしょうか。私には力が及ばない大問題かも知れませんが、これからの私の目の前の課題として、これに向かって努めてゆかなければと思います。

(江東区立第三砂町幼稚園)